

# 未来ノート

-202Xの君へ-

## 体操

# 白井健三

遊びから入った

挫折とロンバク

父と4つの約束

心に「おけと水」

### ほったらかし 観察力開花

両親は大学まで体操選手で、男ばかりの3兄弟は幼いころから体操に親しんだ。絵に描いたような体操一家だが、三男の健三(21)が興味を持つきっかけは遊びにすぎなかった。

健三がまだ3歳のころ、父の勝晃さん(58)は勤務先の横浜市内の女子高で、近所の子どもたちを受け入れて指導を始めた。現在経営する「鶴見ジュニア体操ク

ラブ」の原点である。

小学校、幼稚園とコースを新設すると、指導の手が回らなくなった。子育てに忙しかった元教員の母・徳美さん(53)もかりだされ、3兄弟は毎日、体育館に連れてこられた。

ほったらかしにされた3人が確保した安全な場所はマットとトランポリン。見よう見まねで転がったり、跳んだり。自分たちでルー

ルを作って回数を競い合った。午後9時過ぎに帰るころには疲れ果てて、マットで眠っている日々だった。

「ほったらかしの環境が特別な才能を育んだ」と勝晃さんは振り返る。

たとえば観察力。年上の子どもや兄を見て、どう体を動かしているのかをじっと見て、試してみる。その習慣が、高度な技を頭でイメージしただけで再現する能力を磨いた。

のジュニア大会で、初めての技を次々に成功させたことがあった。小学1年で、女子の指導に採り入れていたダンスの演技を見ていただけで、20人分すべてを踊ったこともある。

自身も中学2年から高校卒業まで所属した、実家の体操クラブはいまや体育館を二つ持つまでになった。夏と冬のオフに帰る健三にとって、そこはいまでも憩いの場所だ。「小さい子から高校生まで年齢層が幅広いので、いろんな体操が見られる。それが楽しい」。遊び感覚は日の丸を背負うようになったいまも変わらない。代表合宿の練習の合間に、喜々としてトランポリンで跳びはねる健三の姿はいつものことだ。



①体操遊びが楽しくてしかたなかったら5歳当時の白井健三提供②世界選手権種目別ゆかで日本史上最年少の金メダリストに輝いたのは17歳のときだった。2013年10月

(潮智史)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。